
Barrie Department ----**ユビキタスの活用法**----

骨休め

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Barrie Department . . . ユビキタスの活用法 . . .

【Nコード】

N8367X

【作者名】

骨休め

【あらすじ】

近い未来、人間とネットワークシステムが密接につながるときがやってくる。とある地方都市にオープンしたバーリーデパートには、数々の斬新な機能が搭載されていた。1話「電子掲示板」、2話「擬似パートナーシステム」、3話「購入履歴」をキーワードにした機械と人間とのパートナーシップを描きます。未完。

序章 Open

時代は高度情報化社会を着々と進んでいる。今まで人間の記憶と判断力で、迷い、間違えながら進歩してきた文明は、コンピュータシステムによる普遍的な一方向を定めることに成功し始めていた。そして本日、とある地方都市のデパートが『未来への大きな飛翔』と大々的に銘打って、数々の斬新な機能とともにオープンした。機械が人間に与える恩恵は、狙いどおり快適な居場所になるのだろうか。それとも無機質な異空間になってしまうのだろうか。

一章 電子掲示板

入り口に入って、テツヤはまず、大きなエントランスにずらりと並べられた端末ボックスに驚いた。およそ五十畳はあるつかという広大な空間に、百以上のポップな色合いの機械が等間隔に置かれている。

高校一年生、好奇心の旺盛な少年は、中高年の客が尻込みするその空間に躊躇いなく足を踏み入れた。ピンクと白の色合いのボックスの前に、若い母親と幼い女の子が立ち、

「この色、きれいね」

と言い合っている。彼は緑と黄色の穏やかな配色を施されたボックスを陣取った。立ち位置から、ちょうどいい目線にあるモニター画面には、

『ようこそ、バーリーデパートへ。最初に画面をタッチしてください』
と書かれている。

軽く触れると、画面の中に八つのキャラクターが現れた。デパートガール風、メイド風、ナチュラル系美少女、キャリアっぽい大人女子。対して反対側の羅列には、スーツ姿のアドバイザー、イケメン青年、さわやか系美少年、着流し姿の長髪美形男子がいる。

「…なんつか：最初から笑える」

苦笑しながら、でも迷いなくナチュラル系美少女を選ぶ。

『音声を出しますか？』

の質問には、照れがあつて『はい』を押せなかった。

画面には少女が大写しとなった。背景が夏の草原に変わっている。風のそよぐ描写がリアルだった。

『左側を見てね。吹き抜けに大きなモニターがあるでしょ？』

彼女の指示どおりに、エントランスから続く広い吹き抜け状のホールに目をやった。中空に浮くような形で、優に二百インチはありそ

うな大型モニターが設置されている。

『あれは電子掲示板なの。あなたの携帯電話からメッセージを送ることができるよう』

少女の説明は、具体的な方法に移る。

まず、携帯電話で画面に提示されたQRコードを読み取って、デパートの用意したサイトにログインする。そのサイトの『電子掲示板にメッセージを送る』の項目をクリックすると、書き込み画面が現れる。そこにメッセージを書き込んで送信すれば、大型電子掲示板に表示されるらしい。

テツヤは試しに『テスト』と短く打ち込んだメッセージを送ってみた。次の瞬間、ピンポーンと澄んだチャイムの音がして、大型画面に『テスト』の文字が現れる。

「お。意外に面白いや、これ」

次には、このデパートで合流するはずだった悪友のユウキに発信してみる。『ユウキ、来てたら電話くれ。テツヤ』。送信すると、友人の名前と自分の名前が大写になった。ちょっと恥ずかしい気もしたが、誰が書き込んでいるのかわからないのだから、別に萎縮する必要もない。

ほどなくユウキから電話がかかってきた。

「遅かったじゃん。一階の奥にあるスポーツ用品店で買い物してるから、そこまで来てよ」

「うん、わかった」

問題なく意思疎通できたようだ。

端末を離れようとすると、少女が、

『また会いに来てよね』

と寂しそうに送り出した。

「その演出、やりすぎでしょ」

再度、苦笑いしながら、でもテツヤは、機械と人間なんて、案外、区別しなくてもいい存在なのかもしれない、と思い始めた。

スポーツ用品店の入り口でユウキの携帯にかけると、
「レジに並んでるよ」

との返事。店に入ってレジを探す。

そして不思議なことに気づいた。ここからは電子掲示板が見えない。ユウキはどうやってメッセージを受け取ったのだろう。

会計を済ませている友人を無事に見つけ、声をかけた。

「おお、おはよ。この建物すげーな。お前、キャラ、何、選んだ？
オレ、メイド」

野球部に所属しているユウキは、持ち前の大声で捲くしたてる。

「メイドとか：恥ずかしいヤツだな」

テツヤは笑いながら、ユウキの購入物の袋を覗き込んだ。ユニフォームの下に着るインナーやグリーンなどが入っている。

「今度もあれにする。名前もつけたしな。オレのさやかちゃん」
相手を崩すユウキに、

「名前つけられんの？どうやって？」

さっきの美少女の名残惜しそうな顔が思い出されて、テツヤも、つい興味を抱かされる。

「デパートのサイトに入った。あそこで会員登録をすると、『自分専用キャラを持ちますか？』って聞かれるんだよ。んで『はい』にして、専用キャラゲット」

ユウキは得意げに、自分の携帯で呼び出した登録画面をテツヤに見せた。

そのとき、画面の中に『電子掲示板』の文字を見たような気がした。テツヤはユウキから携帯をひったくり、確認する。『電子掲示板出張所』と書かれた項目がある。

「これ、何？」

聞くと、

「そこ押すと掲示板に書かれた内容を読むことができるんだよ。チャイムが鳴るから情報が更新されたことは誰にでもわかるんだけど、店に入ったりすると、わざわざ見に行くの面倒だ。だから便利」

ユウキは携帯を強引に手元に戻しながら答えた。

その瞬間、チャイムが鳴った。自分たちには関係のない案件であるのは間違いないが、二人は反射的に『出張所』を開く。『ピンクの水玉ワンピースを着た四歳の女の子を探しています。見つけた方は電子掲示板にてお知らせください』とあった。

「迷子の知らせって、確か、防犯上問題があるから、告知しなくなってるんじゃないっけ？」

ユウキが有名テーマパークなどで取られている手法を持ち出す。目の前を歩く幼児が迷子だと知れば、連れ去ろうとする不審者が出る可能性があるとの配慮だ。

「でも、このデパート、出入口には全部、警備員が立ってたよ。迷子の服装が公表されてるんなら、見逃さないんじゃないの？」

テツヤは反論して視線を巡らせた。今、この瞬間に、該当幼児が近くにいるかどうかの確認をしているのは、自分だけではないはずだ。デパート中に善良な監視が行き届くのなら、見つかるのも時間の問題だと思えた。

ほどなく新規の書き込みが現れた。『ありがとうございます。娘が見つかりました』。それに対して、すぐに、『よかったですね』、『安心したよ』、『買い物楽しんでね』等の返事がつく。

吹き抜けのホールから電子掲示板を見上げながら、ユウキが言った。

「…不覚にも、少し感動したわ」

「さやかちゃんに報告してやったら？」

直情的な野球少年をからかいながら、でもテツヤにも、何となく温かい感情が込み上げていた。

一章 電子掲示板（後書き）

同じようなシステムが実際に稼動していたらすみません。こういうのがあれば便利だなと思って書きました。

二章 擬似パートナーシステム

一人暮らしのカオルは、自分のためだけの食材を買う時間が苦痛で仕方がなかった。美味しいも不味いも、判断するのは自分一人。誰かのために手間をかけるというサービス精神が枯渇していくのがとても侘しい。

このデパートに入って、最初に端末機の前に立ったとき、思わず選んでいたのは、『こんな人となら一緒に暮らしたい』と願ったイケメン青年だった。現実では性格の良し悪しに目が行くほうだけれど、機械の作り出したアバターにそれを求めることはできない。ならば外見の理想を追求するほうが建設的だと判断したのだ。

サイトでの会員登録を済ませ、『翔』と名前までつけると、仄かにだが、バーチャルの人形に人格が生まれたような気がした。彼はデパートの案内だけでなく、雑談にも応じてくれる仕様のようだ。

『今日は暑いね。最高気温は三十二度まで上がるそうだよ』

『カオルの住んでるアパートのそばで道路工事が始まったって。帰り道はナビゲートするね』

『こんな日は辛いものが食べたいな。カオルは何が好き？俺はマーボー豆腐が食べたい』

もう小一時間、休憩コーナーのベンチに腰かけて、こんなふうに彼との会話を楽しんでいる。

『マーボー豆腐かあ。作ってあげようか？』

その気になって誘いかけると、

『ほんと？じゃあ材料の場所をナビするよ。一緒に買い物しよう』
と言ってきた。

携帯を握り締めて食料品売り場に向かう。時折、画面を覗くと、完成された容姿を持つ青年は、周囲に首を巡らせていたり、俯いて考え込んでいたりと忙しない。待ち受け画面のフラッシュ映像みたいなもの、と割り切ろうとしながらも、その人間らしい動きに、カ

オールドはだんだんと引き込まれていった。

売り場に着き、その異様な広さに怖気づきながらも足を進める。すると、豆腐売り場の手前で携帯がバイブした。見ると翔が、

『その先に豆腐が売ってる。見逃さないでね』

とアドバイスしている。豆腐をカゴに入れ、コーナーを離れると、また携帯が震えた。

『反対側に刻みネギが売ってる。調味料は何を使う？選択して』

そして画面に、『レトルト素材』『味噌』『豆板醤』『にんにく』等の関連素材が並ぶ。

普段なら食事は簡素に済ませるほうだ。迷わず『レトルト素材』を選ぶだろう。けれど、カオルは翔のために手作りをしてみたくなった。その他の単発素材にチエックを入れて送信する。

『すごいや。本格的だね。料理得意なの、カオル？』

翔が誉めるので、ちよつと赤面しながら、

『ううん。レシピがほしい』

と答えてみる。すると、

『OK』

と返事があつて、翔の画像の下にレシピのボタンが現れた。

『こつちを参考にしてみて』

ボタンを押すと、飾り気のない画面の中に無機質な文字の羅列が連なった。読みやすいのはいいが、味気なさにがっかりする。

『翔がナビしてくれるのかと思った…』

ぼそりと願望を呟くと、画面の一番下のリンクが目に入った。『音声で読み上げますか？』。何気なしにクリックする。…と。

若い男性のフレンドリーな声が流れた。

『初めまして、カオル。俺を選んでくれてありがとう』

慌てて通信を切り、画面を見つめる。見慣れた待ち受け画面。季節外れの桜がはらはらと舞うフラッシュが単調に繰り返している。

『…ちよつと…すごくない、これ…？』

機械の範疇を越えたパートナーの行動に、感動を超えて恐怖さえ覚

えた。

「やばい。二次元オタクになっちゃいそう」

火照る頬を掌で包んで、もう一度サイトを呼び出す。翔が画面の中で微笑んでいた。

「買い物、続けようか」

促されて、止まっていた歩みを再開する。

「…いつか。こんなに高性能な二次元キャラなら」

開き直って微笑みながら画面を見ると、向こうからも翔が手を振っていた。

二章 擬似パートナーシステム（後書き）

思いつきり主婦の視点。日常でがんばってる些細なことに、協力してもらえたり共感してもらえると嬉しいんじゃないかなと思って書きました。

三章 購入履歴

アミは憤慨を通り越して悲しくなった。結婚して一年、夫の両親との同居は、家の中ではなんとか折り合いをつけられている。けれど一緒に買い物に出かけたときに、購入した商品がダブるのだけは許せなかった。自分がお金を出して買ったものが、

「あら、同じ物を買っちゃったわね。こっちのを使うから、アミさんののは、また今度にしなさいな」

と無残に捨てられてしまうのだ。何度か抗議もしたが、己の腹の痛むわけではない舅と姑は聞く耳を持たない。

それでも解決策を見出そうとネットで検索したところ、ICチップを埋め込んだクレジットカードを使うことによって防げるかもしれないという意見に当たった。具体的なシステムはよくわからなかったが。

この日、オープンしたばかりの大型デパートに両親と出かけたアミは、出産間近の我が子の用具を買い揃えようと、端末で育児用品のフロアを検索していた。年の行った姑たちは、横から覗き込むものの、使い方がわからず、

「こんなものに頼るより、自分で歩いて探しなさいな」

と非建設的な横槍ばかりを入れる。臨月の妊婦がそんなに動けるわけはない。

六階の一角に店舗が密集しているという情報を得たアミは、急がず年寄りたちに引きずられる形で端末を離れようとした。そのとき、画面に現れた『ICチップ』の文字が目に入る。

「お義母さん、ちょっと待って」

姑を引き戻し、しっかりと読み込むと、そこにはこう書かれていた。『ICチップのついたキャッシュカードやクレジットカードで買い物をしていただくと、購入したものの履歴を見ることが出来ます』。

姑は普段からクレジットカードを愛用している。頼んで見せても

らうと、右隅に銀色のホログラムがついている。たしかこれがICチップが埋め込まれている証拠だったはず。端末の指示通りに、そのカードをスキヤナに通すと、『ポーン』と軽快なベルの音が鳴り、『認識しました』の文字が出た。

「アミさんと一緒だと、いつまでも買い物に行けないじゃない」短気な年寄りたちは怒り出した。

「先に行ってるから、アミさんもゆっくり買い物しててね。赤ちゃんの物は買ったりしないから」

笑いながら遠ざかる義父母の言葉がどれだけ信用に値しないかと知っているアミは、憤懣とした感情を何とか抑える。

「私たち、特に食べたいものもないから、アミさんの好きな物買ってきたらいいのよ」

と勧めておきながら、いざ買い物を済ませてみると、

「若い人には年寄りの食べる物がわからないだろうから、やっぱりこっちで準備することにしたわ。あなたの買った物は明日にすればいいでしょ」

と無視される。

「初めての子どもにはこういう物を着せたい」

と夢を膨らませてカゴに入れた衣類は、わざわざ別のレジで買い込んだ姑のバーゲン品の山に圧殺された。嫌がらせをしていることは間違いない。けれど、だからといってそれを逆手に取ろうとしても、「こっちがいろいろやってあげてるのに、あなたが何も準備しないのはおかしい」

と文句をつける。

もし姑が購入した品物の履歴を見ることができれば、ダブった商品避けて、最低限の物だけ揃えられる。解決の糸口が思わぬところで見つかって心臓が高鳴った。画面はさらに『ICチップの情報を見るにはここにアクセスしてください』とQRコードを掲載している。携帯電話で読み取るとパスワードが要求された。当てずっぽうに姑の誕生日を打ち込むと、あっさりとガードが外れる。

ゆつくりとマイペースな動作で六階に向かいながら、アミは、空に向かう吹き抜けた空間のように、自分の心が開放的になっていくのを感じた。わがままで意地悪な義父母を慌てて追いかけていく必要もない。携帯の画面を更新するたびに、姑がニヤつきながらレジを通した涎かけや哺乳ビンなどの商品が並んでいく。

「後は紙おむつぐらいかな」

咳くと笑顔がこぼれた。

「こんなことで、いい気分になれるなんて知らなかった。ありがとう」

無機質な携帯電話に向かって、思わず感謝が口を突いた。

三章 購入履歴（後書き）

人間同士の些細な悪意が招くトラブル。システムがこんな形でサポートできたら、もう少し快適な生活ができるようになるんじゃないかと思って書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8367x/>

Barrie Department ----ユビキタスの活用法----

2011年10月23日02時03分発行